サークル活動

## 子宮頸がん予防啓発活動をするサークル「CATCH project@ほい大」です。




**Cervical cancer**……子宮頸がんとその予防に焦点を当てて活動すること
**Awareness**……子宮頸がんについての認識を高め、理解をひろめること
**Thinking**……問題に対して深く考え、適切な対策を促すこと
**Challenge**……健康を守るために積極的に行動し、挑戦すること
**Health**……この活動が、健康を守ることを目的としていること



「若い女性に身近ながんである子宮頸がんについて、自分の周りにいる友人や大学生を守りたい！自分の健康について主体的に考えられるようになってほしい！」という思いから、2年前に学生4名が集まり活動を始めました。その取り組みが実を結び、今年度サークルとして正式に発足しました。サークル名の「CATCH」は、「子宮頸がん予防啓発活動」における大切な要素を表しています。





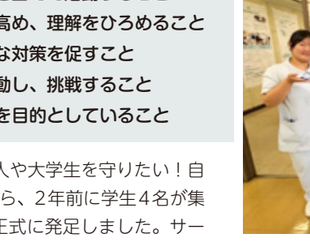
サークル発足前には、レディースクリニックの見学や専門医の先生方からの知識を得て、子宮頸がんについての学習会を行いました。発足直後のオープンキャンパスでは高校生と保護者の方々に子宮頸がんワクチンに対するイメージを聞くなど、正しい知識を伝えるための準備を重ねてきました。これからは、子宮頸がん、ワクチン、がん検診などについて、大学生や若い世代、そして女性だけでなく男性にも知っていただくことを目指し、より本格的に啓発活動に取り組んでいきたいと思います。

2013年に厚生労働省よりHPVワクチンの積極的勧奨が差し控え（ワクチン接種をお勧めしない）が通知され、その後、積極的勧奨が再開された現在も「子宮頸がん予防のワクチンを接種するか悩む」という声は少なくありません。私たちの活動が、子宮頸がんについての正しい知識に触れ、自分にあった選択ができるようになるためのきっかけとなり、がん検診や婦人科への相談など、健康を守る行動につながればと思っています。

現在は、4年生5名、2年生2名、1年生2名の計9名で活動を開始しました。活動理念に共感し、一緒に取り組んでくださる医療専門職の方をはじめ、一緒に活動したいと考える多様な人々のご協力をいただけると嬉しいです。

国際交流

## 「第４回外国語による応急処置体験講習」開催！





令和7年3月8日（土曜日）に本学幕張キャンパスにて「第4回 外国語による応急処置体験講習」を開催しました。学生が外国籍の負傷者や急病人に遭遇した際に適切に対応できるよう、神田外国語大学との共催で行っている講習会です。休日にもかかわらず、本学学生13名、神田外語大学学生13名、計26名の学生が参加しました。

午前は座学形式で、疾患や症状、応急処置場面での英語表現や一次救命処置（心肺蘇生・AED（自動体外式除細動器））の手順・AED使用方法と注意点について学びました。神田外語大学の参加学生の中には、英語以外の外国語を専攻している学生もいたことから、中国語、スペイン語、ベトナム語など、それぞれの言語での応急処置場面での声かけ（表現）について、学生主導で会話練習を実践する場面もありました。

午後は一次救命処置の演習を行いました。実際にAEDを使いながら、それぞれ、第一発見者、AEDを準備する人、救急隊に連絡する人の役割を担い、手早く心肺蘇生に取り掛かります。救急隊が現場に到着するまで平均で10分程度かかるそうで、グループメンバーで交代しながら10分間、心肺蘇生をし続けることを体験しました。10分間という時間の長さを体感するとともに、他者と協力して心肺蘇生を続けることの大変さと大切さを学ぶことができました。参加した学生からは、“他大学の学生との交流は楽しく、とても良い刺激となった！”“将来に活かしていきたい”などの前向きな声がたくさん聞かれました。


千葉県立保健医療大学
ほいだい VOL.3 2026
https://www.pref.chiba.lg.jp/hoidai/



**幕張キャンパス**
看護学科／栄養学科／歯科衛生学科
〒261-0014　千葉県千葉市美浜区若葉2-10-1　☎043-296-2000

**仁戸名キャンパス**
リハビリテーション学科理学療法学専攻／リハビリテーション学科作業療法学専攻
〒260-0801　千葉県千葉市中央区仁戸名町645-1　☎043-305-2125





千葉県立保健医療大学
CPU OHS
VOL.3 2026


# ほいだい



左は前身校の一つである、県立衛生短期大学開学当初の幕張キャンパス周辺の写真です（昭和60年頃撮影）。
まだ建物もまばらでしたが、現在は右のように開発が進み、緑と調和した未来的な町並みになりました

## 生まれ変わるほいだい

**千葉県立保健医療大学　機能強化について　学長　龍野 一郎**



寒さの中にも春の兆しが感じられる季節となりました。皆様におかれましては、日々ご健勝にお過ごしのことと拝察いたします。

近年、私たちの社会は大きな転換期を迎えています。感染症の流行や気候変動に伴う自然災害、急速に進む人口減少、さらには経済格差の拡大など、多様で複雑な課題が重層的に進行し、医療・福祉を取り巻く環境は一段と複雑化しています。とりわけ超高齢社会となった日本では、医療・介護の需要が高まる一方、地域医療を支える人材の不足が深刻化しており、持続可能な保健医療体制を構築することが急務となっています。また、デジタルトランスフォーメーション（DX）や人工知能（AI）、ロボット技術といった先端技術を適切に活用し、誰もが安心して暮らせる医療環境を整えることの重要性も増しています。

こうした社会的要請に応えるべく、県は「保健医療大学の機能強化に向けた調査検討会議」の最終報告を踏まえ、2025年10月に「機能強化の基本方針」を公表いたしました。同方針では、2028年に大学院修士課程の設置および公立大学法人化、2032年には言語聴覚士課程の新設、大学院博士課程公衆衛生学専攻の設置、さらに新キャンパス整備の完了が予定されています。これらの施策は、次代の保健医療を担う高度な専門職を育成し、県民の健康と福祉により一層貢献するための大きな前進であり、本学の発展に向けた重要な節目となるものです。

本学はこれまで、看護、栄養、歯科衛生、リハビリテーションなど保健医療の基盤を支える専門職の育成に努め、千葉県の保健医療政策に寄与してまいりました。今後は、大学院の整備により高度な専門性と研究力を備えた人材を育成するとともに、新キャンパスの実現によって、学びと実践が融合する先進的な教育・研究環境を整えてまいります。また、地域の医療機関や大学・高校との協働をさらに強化し、千葉県全体の保健医療を支えるネットワークの中核としての役割を果たしていく所存です。

これからも本学は、地域に根差した使命を胸に、次代の健康長寿社会を拓く人材育成に力を尽くしてまいります。引き続き、皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 産学官連携 始動！千葉市食育おむすびプロジェクト（栄養学科）

栄養学科学生が考案したおむすびが、令和７年６月11日～１か月間、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県のイオン、イオンスタイル85店舗で販売されました。

きっかけは千葉市食育推進部会時での提案です。千葉市の食の課題（朝食欠食者の低減・共食の機会の増加・野菜摂取量の増加）の解決を図るべく、『おにぎりレシピの商品化』を通じて、イオンリテール株式会社×本学栄養学科×千葉市が連携・協働して食環境整備の強化に取り組むことになりました。

なぜおむすびか。①誰でも手軽に作れ、大人から子どもまで参画しやすい ②創意工夫の幅広さ ③朝食につながるイメージがしやすい、という点より選定されました。『みんなでむすぶ、つながる食育』をテーマに、持続可能な食糧生産につなげられるよう、千葉県の特産品も取り入れました。






応募してくれた14名の有志が検討を重ね、学生の想いと工夫がつまった3品が決定しました。14レシピから3レシピへ厳選する過程では、メーカー担当者より消費者目線の商品のポイントや製造工程での制限、原価の厳しさ等教えていただき、商品開発の難しさを学べる貴重な機会となりました。商品化にこぎつけた3品は、『ノリノリのり佃煮』『元気豚ケチャップライス』『イワシきんぴらおむすび』でした。

また、レシピを考案するだけでなく、健康に関心を持ちづらい同年代の青少年へ効果的に働きかけができるように、広報啓発活動にも参加しました。ポスターやリーフレット等の媒体を考案し、おむすび販売期間はSNSの発信やイオンでの店頭販売も行いました。地域住民と触れ合い生の反応を知ることで、学生はさらに達成感を感じることができました。




参加した学生からは、「段階を踏みながら商品化に近づく過程が、関わっている実感がわいた」「お客様が手に取る瞬間を見ることができて、とても嬉しかった」などの感想が聞かれ、有意義で実践的な活動となりました。

このプロジェクトは、第４次千葉市食育推進計画の一環として令和９年度まで3年間取り組みます。令和８年度はさらにバージョンアップして始動しています。ぜひ皆様も栄養学科学生が考案した🍙おむすび🍙をお手に取って活動を盛り上げていただけるとありがたいです。

## 教育活動 卒業生研究・成果報告支援を行いました（歯科衛生学科）




歯科衛生学科では、在学中に行った卒業研究について、希望者が卒業後に日本歯科衛生学会学術大会においてポスター発表を行っています。これまでに、3名の卒業生が学生研究賞を受賞しています。

本年度は、2名の卒業生が「口腔機能低下症とオーラルフレイルの認知に関する要因と啓発についての検討」および「能動的方法および受動的方法による歯肉マッサージ効果の比較」の2演題をエントリーしました。2人とも在学中から試行錯誤を重ねながら、真面目にそして着実に取り組んでいました。教員も指導やサポートを行い、関連する参考文献を共に調べ、何度も文章の校正を行いながら卒業論文を完成させました。

学会発表を行うには一定の手順があります。卒業後は教員とともに抄録作成や演題申し込みを経験し、初めての学会用ポスター作成に取り組みました。卒業論文をブラッシュアップし、チャットでやり取りをしながらポスターを仕上げる作業は大変でしたが、卒業生との共同作業は楽しい時間でもありました。

発表当日は、ポスターの前で質疑応答に臨む姿がとても頼もしく感じられました。

今回の経験を通して、卒業生にとって今後も研究活動に対して意欲と関心を持つ一助となっていれば、教員として大変うれしく思います。これからの活躍を心から応援しています。



## 研究紹介 脳卒中者の「ぶつからない歩き方」を探る

（リハビリテーション学科　理学療法学専攻　室井 大佑 准教授）



図１．狭い隙間を通過しようとしている様子。例えば左側に麻痺がある場合、左側を前にした方がドアフレームに接触しづらいことが明らかになりました。(Muroi et al., Disability and Rehabilitation, 2024より引用)。

脳卒中の後、歩けるようになっても「狭いところで体をぶつけてしまう」「障害物を避けるのが怖い」と感じる方が多くいます。実は、こうした「ぶつからない動き」には、私たちの脳と身体の協調が深く関係しています。

私はこれまで、脳卒中者がドアのような狭い隙間を通るとき、どんな体の動きをしているのかを研究してきました（図１）。動作解析カメラを使って頭や体幹の動きを3次元で測定したところ、身体の片側に麻痺を持ち、なおかつこれまで転倒した経験のある方がよく麻痺側の身体をぶつけていました。しかし、麻痺側を前にして狭い隙間を通過した場合はその接触が極端に減ることがわかりました（Muroi et al., PLOS ONE, 2017; Muroi et al., Human Movement Science, 2022）。また、この動作を繰り返し練習することは、脳卒中者の効率的かつ安全な回避行動につながることも明らかにされています（Muroi et al., Disability and Rehabilitation, 2024）。このような回避行動は、脳卒中後に左半分の空間が認識できない、いわゆる半側空間無視の症例にも効果的でした（Muroi et al., Neurocase, 2022）。

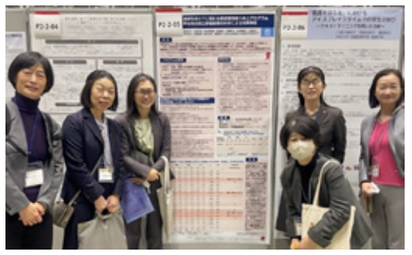
さらに、脳卒中後の身体の状況として、腕の麻痺が強い場合は頭を大きく動かして通ろうとする傾向があることがわかりました（Muroi et al., Motor Control, 2025）。つまり、腕の不自由さを身体全体使って補おうとしていた可能性があります。

私たちはふだん、狭い場所を通るときに「ぶつからないように気をつけよう」とは意識していません。けれども、そこには脳が瞬時に周囲を見て、自分の体の大きさや動き方を予測しているという、驚くほど精密な仕組みがあります。脳卒中では、この「見て・考えて・動く」協調が崩れてしまうのです。

今後は、脳卒中者の予測能力について詳細に評価し、さらにVR（仮想現実）技術などを使って、実際の環境に近い状況で障害物回避のトレーニングを行い、より安全に生活できるためのリハビリテーションプログラムの開発を目指しています。

脳卒中のリハビリテーションは、「ただ歩けるようになる」だけではなく、「安心して動けるようになる」ことが大切です。何気ない動作の中にも、脳と身体の精密な協調があります。その仕組みを科学的に明らかにし、一人ひとりの“動く力”を支えることが、私たち理学療法士の使命だと考えています。

## 研究紹介 地域包括ケアに関わる看護実践能力向上プログラムの開発の研究的取り組み（看護学科　田口 智恵美 准教授）



看護学科社会貢献委員会は、団塊の世代が75歳以上となる2025年を見据えて、地域包括ケア病棟看護師の実践能力向上の必要性に早くから着目し、2021年度学長裁量研究で地域包括ケアを担う看護職に求められる実践能力について明らかにしました。そして、それら能力の向上を意図した研修プログラム開発をするにあたり、社会貢献委員会は共同研究者を募り研究的にその開発に着手しました。

研究メンバーらは、より実践に即した研修プログラムを開発するためには、2025年を見据えた発展的な視野が必要と考え、千葉看護学会学術集会で交流集会を主催し、研修プログラムに対する意見を広く聴取しました。その後、研究メンバー間で検討を重ね、STEP1「患者・家族への支援能力を高める」とSTEP２「地域包括ケアシステムを維持・発展させる連携調整・マネジメント力を高める」の２つの研修プログラムを開発しました。

この研修プログラムについては、2023年度より千葉県内の中小規模医療施設に勤務する地域包括ケア推進を期待されている病棟看護師を対象に、継続して毎年開催しています。これまでSTEP１に43名、STEP2に41名の参加実績があり、研究メンバーらは、2023年度と2024年度の学長裁量研究で、研修参加者を対象にし、研修プログラムの評価を行いました。評価では参加者の満足度は高く、特に他施設の取り組みを共有したり個別事例を検討したりするグループワークに対する満足度が高い傾向にありました。その研究成果は、日本看護科学学会学術集会で2年続けて示説により公表されました。さらに、研究メンバーらは、本研修プログラムを普及する観点から、本学教員ではなく地域包括ケアに精通した看護職者が主体となって運営していけるよう、研修プログラムのグループワークの指針となるファシリテーターガイドの開発に着手することにしました。2025年度学長裁量研究で、ファシリテーターとして参加協力した看護職者を対象に、ファシリテーターガイド案に対する意見聴取を行いました。研究メンバーらは、それらの意見に基づいて、ファシリテーターガイドの開発を進めているところです。

2026年度も地域包括ケア研修プログラムを開催予定であり、2026年度は地域包括ケアに関わる看護職者が、開発したファシリテーターガイドを活用してファシリテーターを行うプログラム内容へと変革します。研究メンバーらは、引き続き研究的取り組みを発展的に行いながら、より実践に即した地域包括ケア研修プログラムの構築を目指していきます。